

【親鸞部門・奨励賞】

宝ものの連鎖

市川高等学校 第1学年 菊池 優衣

そのふたを前にして私は今、わくわくが止まらない。今日は何が入っているんだろう。どんな匂いがするんだろう。そんなときどきを隠せずに思わず頬を緩めながらふたを開ける。すると目に入ってくる赤く輝くまるっとしたプチトマト、鼻を抜ける肉肉しい香りを放つ今日の主役のからあげ。それと同時に聞こえてくるみんなの賑やかで楽しそうな声。そう私の宝ものはみんなでご飯を食べる時間。おいしいものを食べながら、友達とたわいもない話をするこの時間にたまらなく幸せを感じる。でも私がこの時間をちゃんと意識するようになったのは二年前の冬のコロナ隔離期間だった。初めは食欲もなく、大好きなご飯をまともに食べられなかった。そのせいか体重もみるみる減ってしまい、さすがにこれではだめだと思い一日三食しっかり摂るようにした。お母さんが作ってくれた栄養満点のご飯のおかげで体重も元に戻り、体も元気になった。でも一人静かに食事をするのはいつしか一日三回ドアの前に置かれる食べ物を片付けるような行為に変わっていた。ある日の夜、久しぶりに顔が見たいとお母さんがビデオ通話をしながら夜ご飯を食べようと提案してくれた。初めはただ面倒だなと思っていたけれど、溜まりに溜まった話をして笑い転げて、みんなで食べたあの夜ご飯はこれまでの食事とはまるで違っていた。そのとき私は気づいた。一日三回もこんなに幸せを感じられる時間があったのだと。スマホの電源を切り、最後に飲み干したポトフは心の奥の奥まで広がるあたたかさを感じた。この日から私は人とご飯を食べる時間が大好きになった。そして今、私には管理栄養士になるという夢がある。お母さんが作ってくれたご飯のように、全ての人に健康的でおいしいご飯だけでなく楽しくいただく時間まで届けられる人になりたいと思った。私の宝ものが私に夢を与え、誰かを幸せな気持ちにできるような日がくればそれもまた私の宝ものにきっとなる。